2面からつづく

京都リサーチパークにおいて第７回日本の農業と食のシンポジウムが大勢の人々が参加して開催された。由井大会長は「豊受自然農がやっていることは昔ながらの農業。農家から販売までを包括的に行う６次産業化。日本でもさらに広がれば」と語った。

続いて大豆、麦担当の小林且幸さんは豊受自然農の野菜で育てている牛の日本花子の世話係でもある。小林且幸さんは、六本松農場で取り組む大豆栽培の取り組みを中心に発表した。くぬぎ発酵堆肥、ハーブ、ホメオパシーのレメディー、自社開発のアクティブプラント、麹菌や森のミネラル、様々な土壌菌なども活用した土づくり、また自然農での除草などを通じて栽培している中での体験についての発表となった。「豊受では、在来種の中でも自然で、健康によい種での栽培に取り組んでいます。六本松農場でも、6～7年目で在来種の大豆・福豊は、豆腐、みそ、しょうゆづくりなどでは自給できるようになりました。小麦も食物アルレギーなどの出にくいωグリアジンを含まない緑の革命以前の農林61号という品種での栽培を行っています。また黒豆は栽培に苦労しており、種子は保存や乾燥などでも様々学ぶ部分があります。豆類では小豆・大納言などの栽培にも取り組んでいます。1農家での自家採種には取り組んでいますが、大豆、麦類などは、気候などにも影響され収穫が良い年、悪い年もあり、1農家だけでの自家採種では、種とりがうまくいかなかった場合、どうやって種子を確保するのかなども含め、都道府県で種子を育てている機関や、地域で自家採種する農家での協力などが必要な部分もあります」と語っていた。

引き続き、米作りを担当している吉野艶子さんは「幻のお米『朝日米』を育てて」というタイトルで、昨年の収穫で、用賀の豊受オーガニクスレストランへの供給や玄米、分づき米などの店頭販売を含めて、やっと自給ができるようになった六本松農場での米作りについて発表した。「自然農栽培は忍耐づよい除草との戦いでもあります。種もみ、まず発芽にアクティブプラントをつかっていること、自然栽培での草取りでの農機具の工夫などを行っている」として朝日米は江戸時代に西日本を中心に栽培されたが収穫時に実が落ちてしまいやすく、機械化農業での収穫に難もあったため、現在は岡山県などで少ししか作られていない稀少価値のある品種であり、もち米系との交配ないうるち米種では唯一流通している朝日米の栽培について発表した。もち米と交配すると美味しいのですが、血糖値などが上がりやすいので朝日米のような高アミロース米が注目されているという。この日、お昼に提供された豊受あじわい弁当も六本松農場の朝日米という。「ごはんが美味しかった」と評判も良かったようだ。

最後に食品加工を担当している宮田将吾さんは「由井代表の方針のもと、日本の農業を元氣にするモデルケースとなるように、一農家で自立して、若者の新規雇用もでき、給料も払え、食べていけるように食品加工、化粧品加工を含めた六次産業化に取り組んでいる」との話があった。

この後、国史研究家の小名木善行さんが「古来から食、農業、森林を大切にしてきた日本人」と題して来賓講演が行われた。

「ねずさん」としてブログ、書籍などで有名な小名木善行さんからは、本日が母の日ということで、「おかあさんありがとう」と、とらこ先生へ向けてメッセージとともに、母親への感謝をキーワードに講演に入った。

日本は世界で最古の時代、磨製石器がつくられ、世界の文明の発祥地域であることが紹介されました。磨製石器の時代に世界各地でも神話がつくられたとされています。小名木先生からは、新石器時代と縄文文化、および神話との関係、神話が後世の我々に訴えようとしていることは何かを解き明かす話を展開。五重塔は釘を使わずに建立され、屋根の中に土が入っている。仮に火事になった時、屋根の土が火を消すという仕組みになっていると。日本が長い間自然と共存し、自然の中で対話をしてきました。実は『農業の大切さ』を神話の中で訴えていたと。古事記のなかなどで語られる天孫降臨との関係、そこから現在の日本の問題点等について大変刺激的な話を展開した。もうすぐ発刊する本はお奨めですとも。

また、「よろこびあふれる楽しい国にしよう！」我が国の「古代」に言われた言葉であることが紹介した。

またイザナギとイザナミの二神は、そのように語り合ってオノゴロ島を創り、そこに舞い降りて我が日本の国土を生み、私達の祖先となる神々を生んだことを解説。また、日本からは武器で使用した石器が発掘されていません。私達の国は、そもそものはじまりが「よろこびあふれる楽しい国」の建設にある点、そして一部の人達だけでなく民の誰もが、豊かに安心して安全に暮らせるようにしていこう。そのためには、互いに奪いあうのではなく、みんなでわかちあい、誰もが安心して安全に食べられる作物を安定的に作っていこうということが、私達の国が持つ神話の物語である点が紹介され、私達の祖先が目指した本来の日本の形を示した。

午前中、最後の講演はフラワーエッセンス研究家の東昭史さんが「日本原産の植物をフラワーエッセンスから考える」というテーマで講演した。

フラワーエッセンスはイギリスの医師、エドワード・バッチ博士が、1930年代に開発した植物療法。

現在、東昭史さんが日本の植物でフラワーエッセンス（ファー・イースト・フラワーエッセンス）の研究開発が進められている。日本で絶滅の危機に瀕している植物たちを紹介し、水と共に生きて来た日本の植物が絶滅することは日本人の原風景が失われかけているということ、この現状から水や環境、自然に対する畏敬の念や感謝の気持ちを大事にしてほしい、そのためにも植物との繋がりを深めるフラワーエッセンスを使うことで植物の目に見えない本質を自分の中に甦らせましょうということを強調していた。

現在研究している日本の花のフラワーエッセンスからツボスミレ、アヤメの植物のエッセンスの紹介。東昭史さんの植物たちへの愛が伝わる講演となった。

午後のトップバッターは、食政策センタービジョン21主宰人でNPO法人日本有機農業研究会理事の安田節子さん。「多国籍企業のために脅かされる食の安全」とうテーマで講演した。

日本消費者連盟で、食の安全についての活動に長年取り組み、食品添加物の問題、農薬の問題、また遺伝子組み換え食品いらない！キャンペーンを担当され事務局を務めてきた安田節子さんからは、世界に誇る食品衛生基準のからくりを解き明かす内容を語った。

「食べものはいのち、健康を守るものでなければなりません。そのために食品安全規制があるのです。しかしこの安全規制は国民の健康を守るようには機能していません」と言う。

具体的には、輸入食品受け入れのために急速に進む安全規制の緩和の実態や、米国の規制緩和要求の内容、TPP、日米2国間合意などの話、輸入果実の防かび剤の例をあげ、米国農薬基準の受け入れでは、農薬の多くを食品添加物として指定するすり替えて、国民の食の安全をないがしろにする農薬まみれの食品輸入となる点への事実が伝えられた。

また遺伝子組換え（GM）食品の問題についてふれ、日本が世界でもGM食品の消費先とされている実態が報告され、世界の潮流に逆行する実態が報告され、日本でのGM作物栽培への危惧や、最近わかってきたGM食品の安全性の問題、そしてさらに日本では、遺伝子組換え食品の表示制度を改悪して消費者が購入する場合にGM食品であることがわからなくなるような制度の実態なども説明した。

2017年4月から始まった日米経済対話の実態に触れ、日米FTAは結んではならない、またTPPとは貿易協定の名を借りたグリーバル企業による国内法規制の無力化である点を力説した。

続いて山田正彦元農林水産大臣、日本の種子（たね）を守る会顧問は「種子法廃止とこれからの日本の農業について」と題して講演した。

山田正彦さんからは、4月から廃止された主要農産物種子法によって、日本のコメ、麦、大豆が守られてきた点に触れ、一方、農業強化支援法8条3項では銘柄を集約して、大手企業の為に数種に絞られることになるという政策の問題点を指摘した。また写真を見せながらつくばの農業試験場での原原種の栽培や、県による原種の栽培、種子センターによる種子の調整の様子なども紹介。

次に主要穀類の種子が民間に開放されると種子の価格が4～10倍になると危惧され、F1種に変わることで農家が自家採種できずに毎年新たな種を種子企業から購入しなければならなくなる問題点などにも触れ、食料安全保障の視点からは大きな危機であるとした。

実際に始まっている民間のF1種の問題については、農家が契約による種子メーカーに従属する形に変わる実態が実際に農家ととりかわせる契約書を例に話した。

また農業競争力強化支援法8条4項により、これまで日本が蓄積してきたコメ等の原種、原原種、優良品種の知見を民間に提供することになっている点を指摘した。

仮説として、現在、コメのF1種栽培を推進している国内企業の背景にはグローバル種子メジャーがいて、日本の貴重な種子を育種権の登録や応用特許を申請することで、将来日本の農家も彼らにロイヤリティーを支払う形となり、日本の農家が国際種子メジャーに従属する形の農業に移行する点の危惧にも触れた。

さらにすでにグローバル種子企業は日本のコメでの遺伝子組換えでのコメの作付の準備を進めており、将来日本ではコメ作りで遺伝子組換え米の栽培が始まる点が危惧される点、既に日本は遺伝子組み換え農作物の承認大国であり、セットで使われる除草剤で健康被害が懸念されるグリホサートの残留許容量を日本政府は昨年大幅に緩和している点なども話した。

この後、とらこ先生のクライアントさんがホメオパシー相談会を通して得た気づきの体験談を発表した。

4年前、私はその頃うつ病でした。体はやせ細り、食欲もなく、お風呂も入れず、歩けないのでトイレは這って行っていました。毎日死ぬことばかり考えていました。何年もいわれたとおり薬を飲みましたが、いっこうによくなりません。

そんな時「ホメオパシー」を知り、とらこ先生に相談会をしていただくことになりました。

とらこ先生の相談会を通して母親との関係と向き合い、霊性を高めるための祝詞と般若心経を唱えることをはじめました。

私はずっと母の目で自分を見て、否定し、あら捜しをし、自分に意地悪だったことに気づきました。いっぱい泣きました。

これからはもっと自分に優しくしてあげようと思いました。その後、自分の中が愛でいっぱいになってそれがあふれていることに気づきました。自分の中が満たされている。いままでにない、すごく不思議な感覚でした。

自分の美しさに気づき、内面の輝きが外見にも表れ美しくなったこの方は、日本の女性のために「自分を好きになるサロン」をつくるという夢を持ち、数カ月後にはオープンする予定という。「40年以上も、自分の人生を生きてくることができなかった私に、生きる気力と希望を与えてくれたホメオパシーととらこ先生に、心から感謝します」と述べ、発表を終えた。

そして最後に由井寅子大会長の基調講演。（詳細は1面に）

由井大会長の基調講演に万雷の拍手が鳴り響いた後、パネルディスカッションが行われた（詳細は8面に）